

技術開発をめぐるモノと人の交渉

—ユーザーの主体性に注目して—

宮崎大学 芦田裕介

1 課題

本報告の課題は、農業機械というモノを題材として、新規産業技術が人々の社会生活にどのような影響を与え、同時に、人々の社会生活上の必要性が産業技術にいかなる改変をもたらしたのかを明らかにすることである。

社会を構成する重要な要素であるモノに注目して社会現象を捉えるアプローチは、人文・社会科学において注目を集めている。社会学の分野においても、モノ（商品）に注目し、モノと人の関わり（交渉）に焦点を当てて人々の生活経験を記述・分析することで、社会理論の再構成を試みた研究が存在する（天野・桜井 1992）。本報告は、こうした研究の問題関心を踏まえつつ、その方法論の伸展を目指すものである。具体的には、日本の農村社会のあり方に大きな影響を与えた農業機械と人の関わりの歴史的変遷について取り上げる。その際に、ANTにも影響を受けながら、科学技術と社会の関係に注目して農村社会を把握・分析する「農業社会学」を下敷きに、物質文化研究の議論を援用した分析視角を用いる。この視角によって、モノと人の関わりを基点につながる人と人の関係を把握し、こうした関係のあり方がある社会現象に及ぼす作用を分析することを試みる。

2 方法

2009年8月～2012年8月にかけて、岡山県内において断続的に実施したフィールドワークによって収集したデータ、農業機械の技術開発史に関する文献資料を分析する。

3 結果と考察

農業機械とそのユーザーの関わりを基点としてみていくと、ユーザーである農業者は、元々は農業労働の負担を軽減するために機械を必要とした。20世紀初頭に欧米から導入された機械に目を付けたユーザーは、小規模なメーカーと協働し、使用や改良を繰り返し、地域の自然条件や社会・経済的条件に適応する機械の開発を志向した。ユーザーと機械の関わりの中で生じる知識やスキルをメーカーが汲み上げ、新たな技術の開発・普及が進んだのである。しかし、機械の構造の複雑化と農業機械産業の変化によって、ユーザーが技術開発に関与することが難しくなり、農業機械は、メーカーの研究者のような一部の専門家によってつくられるモノとなる。また、多くのユーザーは機械を自身で整備することが困難となり、利用するだけの限定的な関わり方しかできなくなる。技術開発においては、ユーザーの知識やスキルも、ユーザーにとっての必要性も、フィードバックされにくい状況が生じる。

以上のように、モノの開発・普及・利用においてメーカーの影響力が増大し、モノとユーザーの関わり方が変化することで、「専門家依存」が進み、ユーザーの農業労働、ひいては生活における自律性が低下していく。これは、モノとユーザーの関わりが限定されることで生じる問題の一端を示している。他方で、事例からはユーザーの主体性が完全に失われたわけではないことも見えてきた。モノが人の生活を制約しかねない状況に対し、ユーザーの主体性に目を配り、モノと人の関係を再考することが必要だと考えられる。

参考文献

天野正子・桜井厚, 1992, 『「モノと女」の戦後史—身体性・家庭性・社会性を軸に』 有信堂